

愛知県額田郡誌資料に見られる方言記述

Remarks on dialectal expressions in the materials prepared for *Nukata-Gunshi*

山田 敏弘

YAMADA Toshihiro

lingua@gifu-u.ac.jp

1. はじめに

現在、科研費によって、愛知県内の方言資料を収集・データ化し、同時に分析を進めているところである。分析の中心は郡市町村史であり、科研の報告書としては郡市町村史の方言データに限定して公表する予定であるが、郡市町村史のほかにも興味深い資料が何点か集まってきたので、その中から取り上げるにふさわしい内容のものを報告しておきたい。

その1つとして取り上げるのは、『三河國額田郡誌』関連資料である。『三河國額田郡誌』は、同郡役所において、大正12年（1923）に編纂された。愛知県三河地方では、『碧海郡誌』、『愛知県東加茂郡誌』、『愛知県幡豆郡誌』に次ぐ発刊で、郡役所廃止が間近に迫った時期の刊行である。中でも、1006項目の方言記述を含む『碧海郡誌』には及ばないが、三河地方で2番目に大きな403項目もの語彙を採録する点で特徴があるが、もうひとつ、この郡誌を特徴付けているのは、その草稿である「額田郡誌資料」という一連の資料群が存在することである。

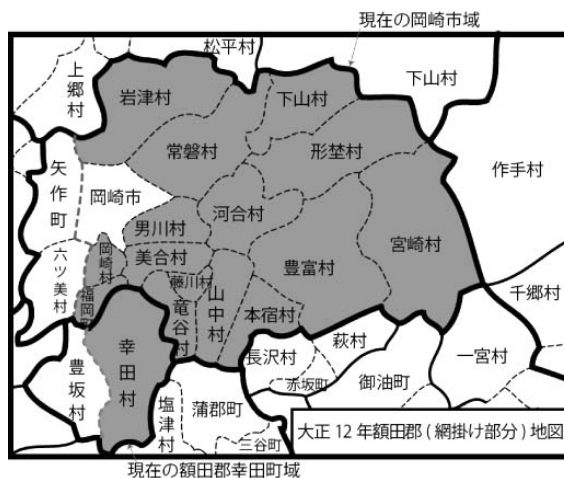
すでに、前稿（2015）において一覧を示したが、各小学校の学区から集められたと思われる資料には、年号が付されていないものも多く、その実態はわからないところも多い。しかし、方言はこの資料収集において大きな目的のひとつとなっていたようで、当時の額田郡1町17村¹から集められた27学区における記述の内、21学区からの報告に方言に関する記述が、多寡は問わないとして、見ることができる。その概要は、前稿（2015:14-15）に一覧表にして詳述したのでここでは繰り返さないが、もっとも大きな資料である常磐学区資料には、方言形式として900項目もの語が採録されている。また、男川、美合、岩津、形埜、下山資料においても、100項目以上が収録されており、『碧海郡誌』を越える規模になり得た可能性もある。

本稿では、前回、詳述しきれなかった、この『額田郡誌資料』について、その方言記述を比較することで、大正時代の当地における方言記述を少しばかり探してみたい。

2. 『額田郡誌資料』の特徴

大正9年の額田郡は、右の色塗り部分で、現在の岡崎市の大部分と、幸田町の東半分が含まれていた。矢作町と六ツ美村は碧海郡から岡崎市へと編入された地域で、今回の額田郡誌資料には収録されていない。

文字はすべて手書きであり、促音や拗音は文字縮小されない。本考察の引用もそのままとする。



¹ 旧額田郡岡崎町は、大正5年に市制施行し額田郡から離脱した。

2.1 常磐資料 (報告年不明)

常磐資料は、名詞からはじまり、代名詞、動詞、形容詞、副詞、助詞、接続詞、感動詞といった品詞順に方言900項目が配列される。名詞の各語形は、五十音順に列挙される。

どのような人が使用する語かについても記述があり、「父」を表す「タアタア」は「下流社会ノ幼児ノ使用スルモノ」、「オヤヂ」は「下流社会ノ大人使用ス」とある。身分階級の意識が厳然とあり、それによって語が違っていたことがうかがわれる。

2.2 下山資料 (大正9年)

名詞100, 代名詞14, 形容詞44, 動詞27, 副詞17, 助動詞9, 接続詞9, 連語39, 敬語11, 雑28を含み、常磐資料に次ぐ規模である。名詞は、動物や植物、鉱物、人事、雑と意味別に分けられている。方言語形を「誤」、共通語形を「正」としている点が、この時代の言語に対する意識を率直に伝えている。

2.3 男川資料 (報告年不明)

「郡誌編纂資料 男川村ノ部」とある。表記に関しては、他の資料同様、促音や拗音は文字縮小されないが、ガ行鼻濁音²が半濁点らしき記号によって表されている点で特徴的である。

また、方言に関し、語彙の他、概説、音韻、語法が挙げられている点でも特徴的である。語彙は、名詞29, 代名詞6, 形容詞6, 接続詞8, 感動詞3, 「接尾語」(実際には助動詞類)5, 副詞12, 音便4, 動詞, 動詞25, 助動詞及助動詞23, 敬語6, 雑25となっており、文法に関心がある筆者が関わったことがうかがわれる。文法として記述された内容については、第4節で述べる。

2.4 美合資料 (大正9年)

美合資料が他と異なる点としては、題名に『美合村々誌』の文字が見られることである。このことは同村にて村史編纂の意識が高まっていたことをうかがわせるが、活字となった痕跡はなく草稿に終わっている。

方言の記述に関しては、やはり矯正が目的と考えられ、「方言」に対して「正しき語」と示されている。内容は、名詞中心に、動物、植物など意味順に194項目が採録されている。「その他」には、「小便桶」やさまざまな病名がならび、時代が感じられる語彙選択がなされている。

2.5 形埜資料 (報告年不明)

語彙は、順不同に127が並べられているが、大半は音訛であり俚言が少ない。一般に、まったく語形の異なる俚言は収集が難しく、音訛の方が見つけやすい。報告期限まで時間がない中で採取という形ではなく、頭で想像して作られたか。

2.6 龍谷資料 (大正10年)

音訛を含め方言語彙が順不同に82形式挙げられている。形式は多くないが、「ぐる」のような「端」を表す俚言から、サ行イ音便の「出いて」、勧誘形「いかまい」のような文法形式まで、幅広く収録している点が特徴的である。

なお、村名は、広く「竜谷^{りゅうがい}」として知られているが、同資料には「龍」の字が用いられている。

²『日本言語地図』(1966) 第1図では、愛知県が三河西部の豊橋市周辺を除き、非鼻濁音地域であると描かれている。愛知県内で筆者自身がおこなった他所の調査でも鼻濁音は聞かれないが、額田郡であえてこのような表記をしてあることは、注目に値する。

2.7 千万町資料（報告年不明）

「ぜまんじょう」と読む。位置は、郡東部にあった宮崎村北部。

名詞59, 形容詞・動詞53と、実詞を中心に採録する。「草鞋」に「ワラウジ」「ワランジョ」「ワランジ」と3俚言を挙げるなど、実際に調査して採取したか内省力をもった人が執筆したか、いずれかが考えられる。これも、方言語形に対して「正」を示しているなど、矯正意識があったと考えられる。

2.8 岩津資料（大正9年）

五十音順にさまざまな品詞のことば132項目を挙げる。共通語形には「正」などの名称が付けられていないが、形容詞を「～し」で終わる形で示したり、「する」の代わりに「す」を示したりするなど、古典語で立項している点が特徴的である。「なぐる」の方言訳に「どらせる」と最初あったものを、「ど」を消し「くらせる」とするなど、何カ所か修正の後が見られる。時間がない中で作られた印象も受ける。

2.9 まとめ

その他、奥殿資料（岩津村）、細川資料（同）、大樹寺資料（同）、恵田資料（同）、本宿資料（おいだいら生平資料（河合村）、山中資料には、50語に満たない程度であるが方言語彙が採録されている。全27資料中21資料に方言の記述があることは、個々の自発的な方針によって資料収集がなされたというよりも、本郡誌編纂に当たり方言を含めてまとめよとの指示があったことを示唆するものである。それは、本宿資料などいくつかの資料に「郡誌編纂要項調査」と記されていることから裏付けられる。

同時代の郡史類の中には、方言記述がないものも見られるが、『額田郡誌』ではその4分の3に方言記述があり、最初から方言記述を入れることが予定されていたと考えられる。では、誰がなぜ『額田郡誌』に方言記述を入れようとしたのか。その詳細は郡史から読み取れないが、時期的に国語調査委員会からの調査依頼が関与していると考えるのが妥当であろう。その痕跡を見つけるのが今後の課題である。

3. 額田郡誌資料に見られる語彙の特徴

今回、すべての額田郡誌資料に採録された方言形式は、のべ2028項目あった。大正13年（=1924）刊行の『額田郡誌』に採録されている形式は403項目（597形式=音訛を除く）であるから、単純に計算しても、郡誌編纂時に3分の2以上が採録されなかった計算になる。

では、どのような形式が採録されなかったのか。もちろん、資料は複数の村の小学校から集められたものであり、重複もあるであろう。しかし、それを考慮に入れたとしてもかなりの語彙が減らされている。本節では、両資料をエクセルデータとして五十音順に並び替えた上で比較の俎上に載せる。

3.1 額田郡誌資料にあった項目が『額田郡誌』で削除されたもの

『額田郡誌』は、同資料3件以上に見られた語は、おおかた拾っている。しかし、2件以下の報告については、採録されているものがあつたりなかったり、明確な基準が設けられているわけではないようである。

額田郡誌資料に採取されたが『額田郡誌』では立項されなかったものとして、次のような項目がある。あまりに膨大であるため、アからはじまる語のみ、「方言形（訳）：報告資料」の順に示し傾向を考えてみる。

- ・アイマニ（たまに、ときどき）：常磐，岩津
- ・アカギリ（あかぎれ）：形埜，常磐

- ・アカチャン (あかご) : 常磐
- ・アカト (山のはげた場所) : 下山
- ・アカル (燈火) : 奥殿
- ・アカン (だめ) : 下山, 龍谷
- ・アサメシ (農家の午前十時頃の飯) : 美合
- ・アスカイ (はすかい) : 常磐
- ・アスコ (あそこ) : 下山, 常盤南
- ・アタマヲカル (理髪) : 美合
- ・アツカル (預かる) : 形埜
- ・アツキ (小豆) : 形埜
- ・アツカイ (暖かい) : 美合, 常磐
- ・アツイ (あつい) : 下山, 形埜
- ・アット (おっと=感動詞) : 常磐
- ・アツレエル (あつらえる) : 形埜
- ・アノナア, アノナン, アノナンシ, アノノウ, アノノン (あのう) : 下山, 山中, 男川
- ・アブラゲ (あげ) : 本宿
- ・アハウ (ばか) : 常磐
- ・アムナイ (危ない) : 形埜, 常磐
- ・アリンゴ, アリンド, アリンボ (蟻) : 常磐, 美合, 細川
- ・アンタガレ (あなたの家) : 常磐

該当する形式すべてを挙げられていない可能性もあるが、語頭がアのものを挙げただけでも、かなりの数に上る。中には、額田郡全体で用いられることばではないため、あえて取り上げなかったということもあるかもしれない。また、龍谷資料で報告される「いろんな (いろいろな)」などのように、共通語と同じ語形が報告されても、それは採録に値しないと判断することは適当であったであろう(ただし、『額田郡誌』では、千万町資料に見られる「アシタ (明日)」および「アサツテ (明後日)」を採録している)。また、下山・形埜資料に見られる「アツイ」のような、形容詞の強意形なども、『額田郡誌』には見られない。何が方言で何が共通語であるか、十分に辞書が普及していない中、やはり適切な取捨選択は困難であったことがうかがわれる。

また、音訛についても採録基準がぶれている。「赤い」を「あけい」、「青い」を「あ江³」などと、音訛を取り上げるのであれば、「アムナイ」も十分に採録する価値もあったであろう。同様の音訛を持つ「ウメイ」は、美合、下山、形埜、岩津各資料に見られるが、『額田郡誌』では取り上げないなど、取り上げる範囲が明確ではない。さらに、さまざまな語形をもつ動植物名について、『額田郡誌』はやや狭い形式のみを取り上げている。「蟻」や「めだか」の俚言形は数が多い分、広く採っておくことも必要であったであろう。

このほかにも、『額田郡誌』に取り上げるべきであった語を、語頭音がア行であるものに限定してランダムに挙げてみると次のようになる。

- ・イカイコト (たくさん) : 美合
- ・イナダク (いただく) : 男川, 龍谷, 形埜, 常磐
- ・イミゾ (どぶ) : 岩津, 常磐

³ 変体仮名。「江」で代用する。

- ・ウヌ (あなた) : 下山
 - ・エガム (ゆがむ) : 岩津, 常磐
 - ・エバル (威張る) : 岩津, 形埜, 常磐
 - ・エレル (入れる) : 千万町
 - ・オコーコ, オコーコー (たくあん) : 常磐
 - ・オトマシー (もったいない) : 美合
 - ・オボワッタ (覚えられた) : 男川, 下山
- } 語頭音「い」に対応する「エ」

「オボワル」などは、なかなか方言と意識されない気づきにくい方言である。せっかく複数の資料において指摘があったにもかかわらず、『額田郡誌』に見られなかったことは残念である。

さらには、『額田郡誌』の「あいまち、江えまち」については、「あやまち (過)」とのみ訳を当てているが、これでは音訛によってのみの採録となる。しかし、美合資料には、「負傷 (けが)」が「えいまち あいまち」として報告がなされている。富山や岐阜など広く、この語が「けが」の意味に用いられていることを考えても、『額田郡誌』に「けが」の意味を載せるべきであったのではないか。

あまた見られるこのような採録語彙選択の粗さについては、『額田郡誌』の「序」に、「尋で該目次により郡内各小學校長に委嘱して参考誌料を蒐集し、刪補整頓して漸く稿を脱するに至れり、困りて之を額田郡誌と名じ公にす、考證は精ならず (中略) 郡制の廢止に會し發刊急に迫りたれば其修正は後日に譲る」とあり、かなり急いで編纂した様子が察せられる。現在でも、このような資料が伝わることとの意義を考えれば、逡巡し刊行されないままとならなかったことは喜ぶべきことである。財政的制約からページ数が決まっていたことも考えられる。しかし、せっかくの資料を半分も採録せず「刪」のほうが多くなったことは遺憾なことである。

3.2 額田郡誌資料には見られない項目を『額田郡誌』で立項したもの

『額田郡誌』には、次のような語を立項されているが、このいずれもが元資料には見当たらない語である。アを語頭音とする語は見当たらなかったので、イ以降を挙げる。

- ・いらふ (もてあそぶ)
- ・いつてい (痛む) cf. イツタイ (痛い) : 常磐
- ・いまいましい (憎い)
- ・うぞげ (産毛) cf. オブゲ (産毛) : 常磐
- ・うづめる (埋める)
- ・うゑる (煙る) cf. ウヤス (煙らす) : 奥殿
- ・おらが人 (夫)

各地で異なる語形を用いるということであれば、それは配慮された選択のもと決められた語形が採録されたと理解もされよう。しかし、「うぞげ」などは、まったく他の資料に見られないものを挙げ、一方で資料として報告した語形は捨てられている。

また、「うゑる」に関しては、奥殿資料に、「ヨクウエル、ウヤスデハナイ、是レハ外來ノ人ニ多シ」と注記まであるにもかかわらず、あえて立項している。これでは、元資料を収集し報告した人々の労苦は報われないというものである。

紙幅の都合で削除しなければならない項目がある反面、資料に基づかない唐突な立項が見られる。しかも、その中に「いまいましい」や「うづめる」のような共通語まで含まれているとしたら、限りある紙幅を有効に用いたかという点で疑問が残る。なぜこのようなことになってしまったのかは不明

であるが、やはり資料に基づいた記述がなされるべきであろう。

3.3 額田郡誌資料には見られない形式で『額田郡誌』において立項したもの

資料として集められた形式とは異なる形式が『額田郡誌』に立項されているものはすくなくない。

- ・アタイ, アタシ (私): 常磐 → 『額田郡誌』では、「あたくし, わたし, おれ, わし, わつち, おらあ, てめえ」
- ・アトンポリ (めだか): 下山 → 「めばんちよ, あとんぼり, めんぼこ」
- ・アニイ, アニゴ (兄さん): 下山, 常磐 → 「にい, あにこ, あにき, あんにい」
- ・アネゴ, アンネー (姉さん): 常磐 → 「ね江, あね江」

俚言形は音訛を含め、多様な変化をしていることがある。どれが正しい語形ということもない。また、人に対する語は待遇によってもさまざまな語形が用いられ、どれかひとつを挙げれば正解ということでもない。

『額田郡誌』には、複数の語形が挙がる項目が少なくないが、それら形式間の使い分けは十分に記されていない。したがって、なぜ、元資料に見られない形式を採用したかも判断する材料がない。この点も十分に検討されるべきであったものと考えられる。

4. 額田郡誌資料に見られる文法形式の特徴

『額田郡誌』では、「方言」として品詞別に項目が挙げられている。品詞としてわかりやすい名詞から始まり、動詞、形容詞と続いた後、後半には、いわゆる付属語が並び、その文法的な記述もおこなわれている。現代でも方言文法に関する記述は、その内容の難しさもあって十分におこなわれていない市町村史も少なくないが、『額田郡誌』では、不十分な点はもちろん後述の通りあるとしても、広範囲に文法形式の記述がおこなわれている。このことは、十分評価されなければならない。

では、これらの文法的表現は、額田郡誌資料とどう関わっているのだろうか。以下、いくつかの観点から考察を進めていく。

4.1 資料ごとに見た文法形式の採録方針の違い

まず、最大の語彙数を誇る常磐資料では、動詞についてその活用を付記するなど、文法事項に対する関心も高い。一方、伝聞の「ゲナ」に対し「推量」としていたり、「(行クダ) ラー」の共通語訳として「(行くだ) らう」を挙げていたり、その分析・記述には疑問点も多い。文末形式に関する採録も部分的なものに留まっている。

採録数はそれほど多くないが、文法的知識のある人が記述したことがうかがわれるのが、男川資料である。男川資料では「語法に関するもの」として、次の形式が列挙されている。全体を引用する(元資料では当該語形が「^o」付きで強調されているが、ここでは下線で代用する。なお、この「^o」は付されたり付されなかったりして一貫性はない)。

(イ) 打消の形式

打消の形式の^oンを用ふ

雨がふら^oん (降らない)

ふらな^oんだ (降らなかった)

注意 東京語にも現在は次第に^oンを打消に用ひる様な傾向があつて國定読本には、フラナイ・フラン・フラナカッタを用ひてゐる。

(ロ) 否定の形式

関東系と関西系とを混用してゐる。「勉強しない」は関東 「勉強せん」は関西系。「せない」は混用

そうぢやない	(そうではない)
勉強せない	(勉強しない)
勉強せねばならん	(勉強しなければならん)
勉強せた ^マ んだ	(勉強しなかった)
案じん	(案じない)

(ハ) 使役の形式

勉強せさせる	(勉強させる)
判ぜさせて見る	(判じさせて見る)

(ニ) 時の形式

進行現在

降つとる	(降つてゐる)
------	---------

未来

起きー	(起きよー)
受けー	(受けよー)

過去

寐ちや ⁴ つた	(寐てしまった)
行つちやつた	(行った)

(ホ) 推量

づら	でせう
づら	だろう

(ヘ) 命令

見ー	見ろ/見よ 「ナサイ」がつく時には「オ」をつけるが普通だけれど つけずに「書キナ」「来 ⁵ ナサイ」とする。
----	--

行きな	お行きなさい
-----	--------

(ト) 形容詞の副詞形

よう来た	よく来た。
早う来い	早く来い。
「ございます」の上だけ	早う としなければならぬ

男川資料は、上記のような文法記述の他に、語彙としても「見えりやせん」や「生やかす」,「お見りる」などの敬語形, 過去推量の「行つつら」などが挙がる。よほど文法に関心があった人が国文法の知見を活用して記述をしたものと推察される。

これにやや似た扱いが龍谷資料にも見られる。龍谷資料は採録形式数82項目という小さな資料であるが、中に、反語の「あらあーか (あるものか)」や勧誘の「いかまい (いきませう)」, 意志の「やめーず (やめよう)」, 推量の「…だらー (…だろう)」に加え、接続助詞の「……するとさいが (すると)」など貴重な記述を含む。やはり文法的知識のある人による記述と考えられるが体系的でない。

⁴ 「ま」と書いた上に字消し線を施し「や」と書いてある。

⁵ 「来」の字は、「来」の意味で本来別辞だが、ここでは「来」の代わりに用いられている。

4.2 『額田郡誌』における記述との比較

語彙と同様、額田郡誌資料と『額田郡誌』との比較をおこなっていく。

残念ながら『額田郡誌』においては、やはりすべての文法事項の報告が盛り込まれたわけではない。『額田郡誌』には、次のような形式が見られる。

六. 助辞の部

驚ろいてはならん	おどけちやーならん
積んでは悪るい	つんじやーわるい
私のところ	わたしんところ
まりをける	まりをける ^マ
君のために	君がために
山へ行く	山い行く
山を見よ	山あ見よ
それくらい	それぐれ, それくれ江
虫であつた	虫だつた
親としても	親だつて

(七.接續詞之部, 八.接頭辞之部, 九.接尾辞之部, 一〇.感動詞之部 省略)

一一. 助動詞之部

下りられる	(可能)	下りれる
來たい	(希望)	來て江
無いらし	(推量)	無いだらあ, 無いだろう
有るまい	(推量)	有るめ江
見へるでせう	(推量)	見へるづら, 見へるだらあ
沈むまい	(推量)	沈まめ江
やめませう	(決意)	やめませえ
事はない	(打消)	事はねえ
塗れない	(打消)	塗れやあせせ ^マ ん
散つた	(終了)	散ちつた
飲んだ	(終了)	飲んじやつた
買ひませう	(希望)	買はあづ, 買はづゑゝ
讀みませう	(希望)	讀あづん
見てゐる	(繼續)	見とる
見よ	(命令)	見され
出せ	(命令)	出しやあがれ
やめなさい	(命令)	やめさつせい

『額田郡誌』 pp.547-549より

分量に関しては男川資料より多いが、形式の選定も用語・分析の正確さも一長一短がある。述部の形式に限って見ても、確かに『額田郡誌』には、ら抜きことばという語形に関してではあるが、可能形の記述があり、男川資料にはない優位さがある。一方、打消の形式については男川資料のほうが詳しく述べられている。また、『額田郡誌』では、命令と卑屬性を混乱しているなど、分析の正確さを欠くものもある。とはいえ、男川資料も、打消と否定の区別の立て方や、時制の未来など、問題もある。

文法は分析力が必要である。『額田郡誌』の方言部分の担当者が、もし自らの職務を全うすること

もさることながら、よりよいものを後世に残したいとより強く願うのであれば、男川資料作成者とともに記述に当たることができたらよかったです。単に独立した存在の他地域の記述であれば、そのようなことは無理なことで願ひもしいないが、同じ地域の、しかも『額田郡誌』の資料として集められた各地資料があつてのことである。緊密な連絡があればよかつたのかもしれない。

5. 額田郡各町村誌への発展

大正年間に郡史編纂のために集められた方言資料は、その後、町村史における方言記述にどのような影響を与えたであろうか。表にして示す。

	額田郡資料		その後の町村史	
岩津村	岩津学区 奥殿学区 細川学区 大樹寺学区 恵田学区 細川学区	132項目 17項目 32項目 10項目 21項目 32項目	『岩津町史』1936 『新編岩津町誌』1985 『郷土史ほそかわ』1973	50語、重複少なし 方言記述なし 方言記述なし
常盤村	常磐学区 常盤南学区 常盤東学区	900項目 22項目 13項目	—	
下山村		298項目	—	
形埜村		127項目	『形埜村のあゆみ』1956	方言記述なし
宮崎村	宮崎学区 千万町学区 大雨河学区	1文記述 112項目 5行	—	
豊富村	夏山学区 鳥川学区	記述なし 記述なし	『豊富村誌』1956	方言記述なし
河合村	秦梨学区 生平学区	概説のみ 5形式	『額田郡河合村村誌』 1982復刻(原発行年不明)	方言記述なし
男川村	男川資料	152項目	—	
美合村	美合学区	194項目	—	
岡崎村	—		—	
福岡村		記述なし	『新編福岡町史』1999	方言記述なし
藤川村		記述なし	—	
龍谷村	龍谷学区	82項目	『村史 龍谷』1997	方言記述なし
山中村		28項目	『山中郷土史』1933	122項目
本宿村		34項目	—	
幸田村	深溝学区	記述なし	『幸田村誌』刊行年不明 『幸田町史』1974,94-96	方言記述なし 方言記述なし
岡崎市			『岡崎市史』1930	457項目

まず、額田郡資料として方言に関する報告をおこなった各村であるが、それが、実際に町村史につながったのは、岩津と山中の2村のみである。

『山中郷土史』(1933)は、28語のみが記された山中資料の発展形であり、122語へと語彙を増やし

ている。この増補は、額田郡誌資料という基礎があったからこそであると推察される。

一方、昭和11年 (=1936年)の『岩津町誌』は、採録語彙数わずかに50語と、上で見た岩津資料の132項目にも及ばない。比較してみると、『岩津町誌』の50語のうち、わずかに13語が岩津資料にさかのぼれるもので、他の収録語彙数のより小さい資料についても、わずかな重複語彙があるのみである。つまり、『岩津町誌』は、せっきくの額田郡誌資料をほとんど参照していないのである。

このように、額田郡誌資料とその後の各地における方言研究とは結びついていない。これは、資料が手書きの一点ものであり、郡役所に報告した後、各地に戻されなかったか、あるいは埋もれてしまったためと考えられる。

研究とは時代を超えた積み上げである。それだけに、郷土教育は、一時期の施政者の気まぐれでなく、長期的視点でおこなわれていかなければならないものである。額田郡誌資料の方言記述は、手本としても他山の石としても、そのことを教えてくれている。

5. おわりに

大正末期には、多くの郡史が編まれた。尾張地方では『東春日井郡史』、『西春日井郡史』、『尾張國愛知郡志』、『知多郡史』が、三河地方では『愛知県幡豆郡誌』と『渥美郡史』が大正12年に編纂されている。三河地方では、さらに、『南設楽郡誌』、『西加茂郡誌』、『八名郡史』が大正15年に刊行されているが、『額田郡誌』はその間の時期に刊行されたものである。

順序はともかく、この時期に相次いで郡史が刊行されたのは、大正12年の郡制度廃止にともない郡業務の整理を迫られたためである。しかし、方言がこれほどまでに取り上げられたのは、郡廃止だけが原因ではない。すでに前稿にて述べたが、明治末の国語調査委員会からの要請によって各地でおこなわれた口語法に関する調査の影響が考えられる。しかし、この『額田郡史』には、順序も内容も、この口語法調査からの影響を受けたものと考えべき特徴が見られない。

このような口語法調査から各地方言集への発展過程は、いまだ謎の部分も多い。今回、『額田郡誌』の成立過程を垣間見る資料が見つかったことから、その一端を明らかにすることができた。それは、郡内各地から資料を集め参照にしつつも、郡誌編纂者の考えによって別の方向性で方言に関する記述をおこなうというものであった。各地収集資料から俚言を集めながらも、必ずしもそれらが一致せず、一種恣意的に記述がおこなわれたことを見れば、それは明らかである。

もちろん、すべての郡史(誌)類において同様の手法が用いられたかは別問題である。おそらく、そうではなかろう。岐阜県旧海津郡でも、同様に各校区から資料を集めて資料としている。これについては、まだ十分な検討をおこなっていないが、次回、同地の方言記述を検討することで多角的に大正期の方言記述の一端をのぞいていくことができるようになるだろう。

【付記】

本研究は、日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)「愛知県・福井県の方言データベース構築および岐阜県方言との関連における総合的研究」(課題番号26370532, 代表:山田敏弘)の研究成果の一部である。

【参考文献】(本文中に引用した方言資料は除く)

国語調査委員会編 (1906)『口語法調査報告書』(1986 国書刊行会より復刻)

山田敏弘 (2015)「愛知県三河地方郡市町村史に見られる方言記述・研究」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』63-2

山田敏弘 (2016)「額田郡常磐資料に見られる方言記述」『岐阜大学国語国文学』41